

令和 4 年 6 月 4 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02584

研究課題名(和文)現代の戦争研究と総力戦研究とを架橋する学際的戦争社会学研究領域の構築

研究課題名(英文)Building a Research Field on War and Society of Japan

研究代表者

野上 元 (Nogami, Gen)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：50350187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：5年間の共同研究により、「戦争と社会」というテーマで研究するための基盤を構築した。それは、歴史学・社会学・文学・宗教学を横断した人文社会科学の学際的領域「戦争社会学」である。具体的には、第一に、これまで膨大に蓄積されてきたアジア・太平洋戦争研究の問題設定をいくつかの現代的テーマに沿って俯瞰し直す作業を進めた。第二に、それらをより広い戦争史や比較によって相対化する理論的視座を確保した。第三に、それらを現在の戦争や軍事の問題と接続するために軍事社会学を批判的に吟味し、その導入にあたっての注意点を明確にした。第四に、本研究が寄与することになる当該テーマをめぐる社会意識の調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既存研究を整理するために分野別動向紹介を年に1編ずつ公刊した。またアジア・太平洋戦争を相対化する視座の確保のための作業「戦争史記述の社会学的規準」を完結させた。また、さらに現在の軍事や戦争を捉える視座として、日本でまだ紹介があまり進んでいない軍事社会学の視座、とくに「ポストモダン・ミリタリー」論の批判的検討を試みた。また、ウクライナ侵攻直前・直後にインターネット社会意識調査を実施し、過去を参照しつつ現実に起こってしまった戦争に直面する人々の意識の揺れを明らかにした。これらにより、過去の研究の蓄積を受け継ぎながら現代の戦争研究を進める研究遂行・成果発信の基盤を創り上げることができた。

研究成果の概要(英文)：Through five years of collaborative research, we have established a foundation for research on "War and Society. It is also known as "sociology of war," an interdisciplinary field of humanities and social sciences that crosses history, sociology, literature, and religious studies. Specifically, first, we have reexamined the problem settings of the vast amount of research on the Asia-Pacific War that has been accumulated to date in terms of several contemporary themes. Second, we have secured theoretical perspectives to relativize them through broader war histories and comparisons. Third, we critically examined military sociology to connect it to the current war and military issues and clarified points of caution in its introduction. Fourth, we surveyed social consciousness on the subject to which this research will contribute.

研究分野：戦争社会学

キーワード：戦争社会学 戦争と社会 戦争体験 戦争の記憶 軍事社会学 新しい戦争 自衛隊 社会意識

1. 研究開始当初の背景

(1) 膨大に存在するアジア・太平洋戦争についての研究蓄積

1945年の敗戦以来、我が国においては、アジア・太平洋戦争について、戦争の惨禍に対する真摯な反省に基づいた膨大な研究の蓄積がなされてきた。それらは反戦・平和を国是としてきた戦後日本社会の貴重な財産であるといえるが、同時にそれらは、冷戦という世界史的文脈を強力な背景にしたものでもあった。当時と同じ認識のまま過去の研究を継続してゆくのではなく、そうした時代的条件を自覚して相対化したうえで研究を継続してゆかなければならない。そのため、冷戦後の現代の戦争、所謂「新しい戦争」の時代に対応できるものとして、過去の問題設定を冷戦後の状況を踏まえて再定義する必要がある。

(2) 現代の戦争・軍事に関する国内での研究の進展の遅れ

アジア・太平洋戦争に関する研究蓄積の膨大さの一方で、現代の戦争や軍事に関する蓄積はあまり多いとはいえない。現代の戦争や軍事に関する研究の多くは、安全保障研究や国際関係論など、(大きく言えば)政治学の研究領域に限定されていて、人文社会科学に跨がるアジア・太平洋戦争研究の蓄積における学際性、視点の豊富さと比較すると非常に狭い領域における研究となってしまうている。冷戦後の戦争の「古さ」と「新しさ」をめぐる、人文科学的な知見が発露される必要があるはずである。

(3) アジア・太平洋戦争についての研究蓄積を現代の戦争・軍事に関する研究に応用するために必要な理論的な枠組みの不在

その結果として、アジア・太平洋戦争についての膨大な研究が、良くも悪くも「あの戦争」を人文科学的な戦争研究における one and only にしてしまっている。これが研究者(そして日本社会)の戦争観を拘束し、視野を限定してしまっているのではないか。

もちろん、これは私たちにとっての(離れることのできない)歴史的・文化的な文脈である。もちろんその上で現代の状況に即して考えなければならない。つまり、アジア・太平洋戦争についての研究蓄積を喪うことなく現代の戦争・軍事に関する研究に応用するための理論的な枠組みが求められているはずである。

(4) 研究を世に問うための前提ともいえる、現代における戦争観や平和観に関する社会意識について、つまり人々が何を考えているのかについての調査が不足

一方、こうした研究を進める目的であり、あるいは寄与するところである言論や社会意識はどうなっているか。戦争や平和、軍事に関する意識調査は、内閣府や新聞社、あるいは一部の研究者や研究グループによって行われてきた。しかしながら、それらは意識の分布を明らかにすることを目的としていて、対立や矛盾や逡巡を含んだ意識の構造や動態を明らかにするものとなっていない。研究の成果と世論・言論とが無関係ではない人文科学的な「戦争と社会」研究において、その出発点たる前提が不明瞭だということであり、すなわちこれは、研究が遂行されることへの社会的な位置づけが自ら明確にできていないということを意味している。

2. 研究の目的

上記のような研究状況・社会状況を背景に、本研究は次のような目的を定めた。

(1)-1 これまでの研究蓄積を整理し、現代的なテーマを再定義すること

背景(1)に対応する研究目的を述べる。

膨大に研究蓄積があるということは、逆に言えば、それぞれの研究において、論点を明確にしながら過去の研究を参照するという作業が欠けているということの意味している部分もあるのではないか。もちろん、同じテーマ・内容の研究が繰り返されること自体が悪いことなのではない。例えば「戦争体験の継承」という研究目的があったとして、その意味は1960年代と2020年代とは違うはずである。人文社会科学の研究は時代的な文脈と不即不離であり、繰り返される研究は、時代状況に乗りながら、少しずつ内容を変化させていることも確かである。ただ自らの研究を取り巻く歴史的な文脈に無自覚であるかそうでないかは大きく違う。

本研究では、過去の蓄積を精査する作業を特に重視し、なかでもそれらを現代的なテーマ設定において再定義することを一つの目的とした。

(1)-2 戦争研究の比較・理論的視座の確保

時代的文脈の自覚化とあわせて、次のような理論的な視座の確保が必要となる。すなわち、背景(1)に対応する研究目的はもう一つある。

膨大な研究成果を現代的な関心において再活性化させるためには、理論的な視座確保の試みが必要となる。それはなによりも、アジア・太平洋戦争の(その社会的な意味における)歴史的相対化である。さらに、現代の戦争を考える上で特に必要なのは、比較の視点に立つことである。

日本社会が経験したアジア・太平洋戦争は、どのような特殊性と普遍性を持っているか、これを明らかにする必要がある。もちろんそれは、精緻な歴史的研究というよりも、比較史・比較社会学・比較社会論的な視座、すなわち(時にはある程度の単純化も孕んだ)理念型による相対化である。

これにより、歴史的な来歴・文脈を可能な限り重視しつつ、現代的な検討を進めるための研究基盤を確保することができる。これが本研究の目的となる。

(2) および(3) 軍事社会学の成果の吸収による視座の確保

次に背景(2)および(3)に対応する研究目的を述べる。

現代の戦争に関する研究は、とくに軍事に関する研究、すなわち「軍事・軍隊と社会」という視座を不可欠のものとする。多くの国において20世紀後半から世紀末にかけて徴兵制が廃止されたが(日本の廃止は1945年)、徴兵制から志願制・職業制への移行は「軍隊と社会」の関係を変容させ、さらに「戦争と社会」の関係を変容させている。そのことの意味にいち早く気づき、様々な研究成果を挙げているのが「軍事社会学 military sociology」である。この視座に大いに学びたい。ただし、それらの成果や分析装置をたんに「輸入」するのではなく、前述の歴史的経験や研究の蓄積を経たかたち、つまり戦後及び現代日本という文脈を加味し、批判的に導入することが必要となる。

(4) 戦争・軍事に関する一般社会の意識の構造を理解する作業

最後に、背景(4)に対応する研究目的を述べる。

本研究には、戦争や平和、軍事に関する社会意識の調査が不可欠である。人文社会科学的な「戦争と社会」研究においては、研究の成果と世論・言論とが無関係ではなく、不即不離なものとなっているためである。その目的は二つある。一つは、本研究も内属する日本社会の戦争観を把握し、自ら掘って立つところの歴史的・文化的な文脈を踏まえて改めて自覚すること、もう一つは、数多くの対立点や矛盾点がある社会意識において、本研究の成果が啓蒙や介入、論点整理において有効な地点を探すことである。

3. 研究の方法

上記のような研究目的に対し、本研究は次のような研究方法を採った。

(1)-1 共同研究参加者によるテーマ別研究動向紹介執筆

社会学・歴史学(日本史・西洋史)・文学・宗教学をバックボーンとする参加者それぞれにより、「テーマ別研究動向紹介」を順次執筆・公開してもらった。

これが研究目的(1)-1に対応する研究の方法である。

(1)-2 「戦争史研究の社会学的規準」の理論構築

研究目的(1)-2に対応する研究方法は次のようなものである。

これまでに進めてきた戦争形態と社会記述(社会編成の原理を浮かび上げようとしたもの)の関係を問う考察に続き、もっとも現在に近い現代の戦争(「新しい戦争」)を情報社会(論)との関連で捉えるための理論枠組みを検討する。情報社会論が「人間」をどう捉えているかの考察を行い、一方で情報社会論に孕まれている「戦争」論を取り出し、両者の対応関係を理論的に検討した。つまり、戦争論として情報社会論を再読することを試みた。

(2)(3) 軍事社会学の学説史の批判的検討

研究目的(2)および(3)に対応する研究の方法として、軍事社会学の歴史を俯瞰し、それぞれの時期における軍隊と社会の関係を参照したうえでその理論的含意を明らかにする。いくつかの貴重な例外を除き、日本において軍事社会学の成果は豊かではない。そのような研究自体が不要とみなされていたということもある。

軍事社会学の成立の文脈を、当該社会の「軍隊と社会」の状況を文脈として検討し直し、その批判的吸収を試みた。

(4) 戦争・平和・軍事に関するインターネット調査

研究目的(4)に対応する研究方法は次のようなものである。

今回の調査では、無作為抽出や訪問調査による正統的な社会意識調査ではなく、今後の研究を進める上での論点や争点を浮かび上げさせるためのものとなる。このため、今回の調査は探索的なものを目指す。それにより、今回の調査はインターネット調査によって行った。

4. 研究成果

(1) テーマ別研究動向紹介

本研究課題のメンバーおよび研究協力者により、「戦後七〇年と「戦争の記憶」研究 - 集合的記憶論の使われ方の再検討」(2019年)、「日本の銃後」(2020年)、「軍隊の人的資源政策 - 合理主義、文化主義、構造主義」(2021年)、「ドイツ語圏における空襲研究の動向」(2022年6月刊行予定)が研究動向紹介の成果として公刊された。これらは全て『戦争社会学研究』(みずき書林)の各号に一編ずつ掲載されたが、過去の研究を踏まえつつ最新の研究状況を図示・共有する

ものとなっている。そして、こうした試みが連続してなされたことにより、戦争社会学的研究の基盤のなかに、常に過去の蓄積を現代的な問題関心で再定義し直す作業が傾向としてセットされたといえる。

(2) 現代の戦争を含んだ「戦争史の社会学的規準」の構築

「人間の拡張」を語るメディア論を始め、情報社会論における「人間」という観念の由来や概念装置としての位置づけを検討しなおした。また一方で、現代の戦争、いわゆる「新しい戦争」が「人間」の輪郭を揺らがせながら進行していることを示し、両者の対応によって現代の戦争の歴史的な位置づけをその新しさと古さにおいて明らかにした論考「情報社会論と「人間」の戦争」(『シリーズ戦争と社会(1)「戦争と社会」という問い』岩波書店、2021年所収)を完成させた。これにより、既発表の「市民社会論と「国民」の戦争」「大衆社会論と総力戦」「消費社会論と冷戦」の論考を踏まえ、近代社会が経験した戦争の歴史と、社会を把握しようとする社会記述の試みの歴史を対応させる作業が完結した。

その結果、日本社会における戦争観、それに基づく(基づかざるを得ない)戦争研究における「戦争」を歴史軸・比較軸において相対化する(前提にとらわれない)理論的基盤を構築することができた。

(3) 軍事社会学の批判的検討、特に現代日本社会研究に対して与える示唆

「軍事・軍隊と社会」を捉える概念装置や理論枠組みを提供してくれる軍事社会学だが、その成立をめぐる社会的な状況をたどり直すことにより、軍事社会学の成立と展開それ自体にそれぞれの時代の「軍隊と社会」の関係が文脈として関係していることが明らかになった。また、現代日本の応用にあたっては、「政軍関係論」の必要性、および「徴兵制の廃止」という軍事社会学の成立と展開の契機が欠けているので、いっそう「軍隊と社会」の関心に慎重になりながら軍事社会学の導入を試みるべきだと言うことを明らかにした。以上は論文「軍事におけるポストモダン - 現代日本における社会学的探究のために」(『社会学評論』72巻3号、2021年)として公開された。

(4) 戦争・平和・軍事に関する社会意識を検討するに当たっての論点の明確化

2022年2月にインターネット調査会社を利用し、戦争・平和・軍事に関する社会意識調査を行った。また、同月のロシアのウクライナ侵攻を受け、私費により同じ回答者への追加調査を3月上旬に行った。反復調査を試みたことにより、戦争の現実を受け、回答を変化させる(あるいはさせない)など、躊躇と決断をめぐる複雑な意識を見ることができた。戦争への「参加」など当事者性に関連する設問に対しては「分からない」の回答が多く、それは知識量や関心が高いが故に起こっているという傾向も見いだされた。この成果は研究期間直後の2022年4月に論文「わからない(DK)という無責任、それとも希望?」(『思想』2022年5月号)として公表された。

(5) 上記の成果の可視化

上記のような本共同研究の成果は、戦争社会学研究会編『戦争社会学研究』(年刊、みずき書林)によって可視化されている。また、本共同研究から蘭・一ノ瀬・西村・野上・福間が編者として参加した『シリーズ戦争と社会』(全5巻、岩波書店、2021-22年)は、過去の総力戦研究と現代の戦争研究とを架橋する試みの現時点での到達点を可視化する試みとなっており、「戦争と社会」研究を進める基盤構築が進んでいることを社会に訴える手段として、本研究の明確な成果だといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計42件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 西村明	4. 巻 1177
2. 論文標題 戦没者慰霊と紀元節	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 91-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福間良明	4. 巻 1177
2. 論文標題 歴史小説のなかの「戦争と社会」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 74-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬俊也	4. 巻 1177
2. 論文標題 ある幹部自衛官の思想と行動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三	4. 巻 1177
2. 論文標題 「身体化された軍隊経験」を振り返る	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 46-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 1177
2. 論文標題 「わからない(DK)」という無責任、それとも希望?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 66(1)
2. 論文標題 書評 渡邊勉著『戦争と社会的不平等：アジア・太平洋戦争の計量歴史社会学』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 121-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 72(3)
2. 論文標題 軍事におけるポストモダン：現代日本における社会学的探究のために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 224-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nogami Gen	4. 巻 36
2. 論文標題 Historical sociology in Japan: Rebalancing between the social sciences and humanities	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Sociology	6. 最初と最後の頁 160-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/02685809211005346	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 49(11)
2. 論文標題 終わる日本と終わらない日本 : 聖戦・革命・核戦争	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 70-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUKUMA, Yoshiaki	4. 巻 7
2. 論文標題 The Arguments on War Experience in Postwar Japan and "Criticism of Victim Mentality"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都メディア史研究年報	6. 最初と最後の頁 217-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/KJMH_7_217	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村明	4. 巻 16
2. 論文標題 架橋としての視覚物 - 戦地訪問映像を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24530/jjoha.16.0_27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村明	4. 巻 4
2. 論文標題 記憶とたましい - 戦争死者の遺骨をめぐる対応から考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 64 - 72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村豊	4. 巻 16
2. 論文標題 オーラル+ビジュアルを通した「過去」との向き合い方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 59 - 63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24530/jjoha.16.0_59	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 4
2. 論文標題 戦争社会学が開いた扉 - 研究会初期一〇年の活動を振り返って	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 122-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 6
2. 論文標題 「見捨て体験」と死者の顔の反復：中沢啓治「はだしの ゲン」にみるトラウマ記憶の問題と現代日本社会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Literature and Trauma Studies	6. 最初と最後の頁 160 - 177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬俊也	4. 巻 55(4)
2. 論文標題 「荒縄の遺骨箱」流言にみる銃後民衆の意識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 4 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬俊也	4. 巻 55(1)
2. 論文標題 「総力戦」指導者としての東條英機	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 55(4)
2. 論文標題 第一次世界大戦の空襲が生んだドイツの「銃後 (Heimatfront)」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 67-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三	4. 巻 2019年10月号
2. 論文標題 コメント2 移動する人々は国民国家を脱構築できるか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 31 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三・蘭由岐子	4. 巻 2019年9月号
2. 論文標題 書評 大門正克『語る歴史、聞く歴史 - オーラル・ヒストリーの現場から』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 105 110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三・鈴木江理子	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 特集「アジアがひらく日本」によせて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 1 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三	4. 巻 14
2. 論文標題 『戦争と性暴力の比較史に向けて』刊行記念シンポジウムの特集によせて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コスモポリス	6. 最初と最後の頁 25 26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nishimura Akira	4. 巻 66
2. 論文標題 The Commemoration of the War Dead in Modern Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Numen	6. 最初と最後の頁 139 ~ 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/15685276-12341536	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西村明	4. 巻 36
2. 論文標題 An Approach to a Local Faith and its Worldview : Iwao MUNAKATA 's Minamata Theory and Fieldwork	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学宗教学年報	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nogami Gen	4. 巻 6
2. 論文標題 Reexamining the Fear of the A-Bomb and the Imagination of Premonition: Reporting and Recollection in the Works of Tamiki Hara	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Literature and Trauma Studies	6. 最初と最後の頁 37-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三	4. 巻 14
2. 論文標題 特集1 戦争経験の継承とオーラルヒストリー はじめに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24530/jjoha.14.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村明	4. 巻 2
2. 論文標題 旧戦地に残されたもの - 特集のねらいと補助線	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 156-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊勉	4. 巻 33(2)
2. 論文標題 職業経歴の不平等	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 理論と方法	6. 最初と最後の頁 218-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊勉	4. 巻 129
2. 論文標題 アジア・太平洋戦争は誰の生活を变化させたのか：1955年SSM調査による階層帰属意識の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 29-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊勉	4. 巻 130
2. 論文標題 1930年代から1970年代までの地域移動と地域間格差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 51-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊勉	4. 巻 131
2. 論文標題 職歴からみる地域移動と職業間格差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 95-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊勉	4. 巻 131
2. 論文標題 兵役・外地経験と地域移動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 44
2. 論文標題 戦後ドイツの歴史論争に空襲論争を位置づける 「被害者の国家」の形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 独語独文学研究年報	6. 最初と最後の頁 251-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 50(10)
2. 論文標題 民衆・女性・マイノリティ：高畑勲の映画における戦後民主主義のイメージ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 56-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 2
2. 論文標題 戦争映画の社会学のために 塚本版映画『野火』を題材として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 1
2. 論文標題 「戦争社会学」が開く扉	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『戦争社会学研究』	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬俊也	4. 巻 296
2. 論文標題 民衆に航空戦のあり方を教える権力：太平洋戦争期の軍事知識解説書をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 2
2. 論文標題 核の「重さ」と「軽さ」：一九七〇年代論の手がかりとして『太陽を盗んだ男』を読み解く	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新社会学研究	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 71
2. 論文標題 ヴァイマル期ドイツの民間防空と「平和」の敗北 「守り」と「平和」の批判的検討に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史論	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 19
2. 論文標題 ドイツの防空施設は人びとを守ったのか？1930～40年代における「トータル」な防衛空間の可視化をめぐ る諸相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 空襲通信	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 1
2. 論文標題 企画の趣旨、そしてそれをさらに「超える」ために	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊勉	4. 巻 127
2. 論文標題 職業軍人の退役後の職業経歴	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 西村明
2. 発表標題 死者と生者をつなぐアート 多様な慰霊を生み出す想像力と創造力
3. 学会等名 現代民俗学会第51回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 貧困におちいる戦災母子家庭の特徴：貧困層の形成（静岡）調査の分析
3. 学会等名 戦争社会学研究会例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 戦争研究における計量的方法の可能性
3. 学会等名 戦争社会学研究会合評会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ドレスデン空襲の記憶の変遷
3. 学会等名 米軍資料の調査・活用に関する研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 庭田杏珠・渡邊英徳『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（光文社、2020年）のパブリックヒストリーとしての可能性
3. 学会等名 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議・第50回大会：大会シンポジウム「21世紀の空襲の記憶・表現」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福間良明
2. 発表標題 「特攻の町・知覧」の戦後史 「他者の記憶」の逆輸入と「無難さ」の政治学
3. 学会等名 同志社社会学研究学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 アジア・太平洋戦争時の庶民の意識：戦中日記のテキストマイニング
3. 学会等名 日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 引揚者の戦後の不安定性：1951年京浜工業地帯調査の2次分析
3. 学会等名 数理社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 日記からみる庶民のアジア・太平洋戦争：山田風太郎の戦中派日記のテキストマイニング
3. 学会等名 関西社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 引揚者の戦後：1951年京浜工業地帯調査の2次分析
3. 学会等名 戦争社会学研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 Die Erinnerungskulturen des Bombenkrieges in Japan
3. 学会等名 アウクスブルク大学歴史学部コロキウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ドイツ・ミュンヘンでヨーロッパ近現代史を研究する意味 在外研究の成果と教育上の効果
3. 学会等名 東京女子大学・読史会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 空襲の記憶文化 日本とドイツ、「想起」と「忘却」の比較を通じて
3. 学会等名 ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 Kommentare zur Geschichte vom zivilen Luftschutz in Deutschland und Japan Über die Aehnlichkeiten und Uenterschiede
3. 学会等名 On the Transnational Destruction of Cities（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 蘭信三・西村明
2. 発表標題 シンポジウム「軍事研究と大学とわたしたち」
3. 学会等名 戦争社会学研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 蘭信三
2. 発表標題 コメント2 移動する人々は国民国家を脱構築できるか
3. 学会等名 歴史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Araragi, Shinzo
2. 発表標題 Comments and Questions for the Panel “Displaced Subjects of Japanese Modernity”
3. 学会等名 Association for Asian Studies in ASIA（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野上元
2. 発表標題 日本の戦争社会学の現状と課題
3. 学会等名 戦争社会学研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Araragi, Shinzo
2. 発表標題 "Repatriation, Settlement, 'Left-behind' and 'Smuggling': the racial migration after W.W.II. in East-Asia"
3. 学会等名 East Asian Seminar Series at the University of Cambridge (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村明
2. 発表標題 日本の公的慰霊における脱色された宗教性とその担い手
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 パブリックヒストリーの実践と考察 長崎の「ダークツーリズム」を例に
3. 学会等名 パブリックヒストリー研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 貫戦史による日本ナチ・カルチャーの再検討 「残虐」と「正義」のゆらぎとしての1980年代初頭
3. 学会等名 コンテンツ文化史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本昭宏
2. 発表標題 批評報告(1)米・ソ(口)の核超大国を中心に：論集『核開発時代の遺産：未来責任を問う』(昭和堂、2017)によせて
3. 学会等名 日本ドイツ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nogami, Gen
2. 発表標題 Cultural Aspects of Postmodern Military in the Case of Japan Self Defense Forces
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野上元
2. 発表標題 「誰/何が原爆の恐怖を媒介したのか? 原民喜における「報告」と「予感」」
3. 学会等名 シンポジウム「戦争文学のトラウマ」(甲南大学人間科学研究所)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野上元・福間良明・山本昭宏・成田龍一・青木深・松下優一
2. 発表標題 シンポジウム「『野火』の戦争社会学」
3. 学会等名 戦争社会学研究会第8回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yamamoto Akihiro
2. 発表標題 Nuclear Fear in Special Effects Programs on Japanese TV in the 1960s and 1970s
3. 学会等名 EAJS2017 Conference in Lisbon (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 両大戦間期ドイツの民間防空における「平和」の敗北 - 「守り」のイデオロギーとの相克 -
3. 学会等名 日本平和学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊勉
2. 発表標題 復員兵からみた戦後占領期の労働市場 - SSM調査の職歴データの分析 -
3. 学会等名 戦争社会学研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計25件

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 258
3. 書名 変容する記憶と追悼	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 266
3. 書名 社会のなかの軍隊 軍隊という社会	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 266
3. 書名 言説・表象の磁場	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 278
3. 書名 総力戦・帝国崩壊・占領	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 252
3. 書名 「戦争と社会」という問い	

1. 著者名 蘭 信三、松田利彦、李 洪章、原 佑介、坂部 晶子、八尾 祥平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 728
3. 書名 帝国のはざまを生きる	

1. 著者名 鍋谷郁太郎、柳原伸洋、梅原秀元、川手圭一、勝田由美、池田嘉郎、姉川雄大、今井宏昌、黒沢文貴、剣持久木	4. 発行年 2022年
2. 出版社 錦正社	5. 総ページ数 355
3. 書名 第一次世界大戦と民間人	

1. 著者名 山本 昭宏	4. 発行年 2020年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 320
3. 書名 近頃なぜか岡本喜八	

1. 著者名 一ノ瀬 俊也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文藝春秋	5. 総ページ数 384
3. 書名 東條英機 「独裁者」を演じた男	

1. 著者名 石田勇治、川喜田敦子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ	

1. 著者名 日本平和学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 204
3. 書名 戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー	

1. 著者名 蘭 信三、小倉 康嗣、今野 日出晴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 512
3. 書名 なぜ戦争体験を継承するのか	

1. 著者名 吉田 純、ミリタリー・カルチャー研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 432
3. 書名 ミリタリー・カルチャー研究	

1. 著者名 渡邊勉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 戦争と社会的不平等：アジア・太平洋戦争の計量歴史社会学	

1. 著者名 一ノ瀬俊也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 249
3. 書名 特攻隊員の現実(リアル)	

1. 著者名 菅豊・北條勝貴編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 479
3. 書名 パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦	

1. 著者名 堀江宗正編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 404
3. 書名 宗教と社会の戦後史	

1. 著者名 坪井秀人編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三人社	5. 総ページ数 603
3. 書名 戦後日本文化再考	

1. 著者名 日本移民学会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 日本人と海外移住	

1. 著者名 一ノ瀬 俊也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 242
3. 書名 昭和戦争史講義	

1. 著者名 西村明編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 隠される宗教、顕れる宗教	

1. 著者名 田中雅一・松嶋健編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 652
3. 書名 トラウマ研究1 ト라우マを生きる	

1. 著者名 上野 千鶴子、佐藤 文香、姫岡 とし子、山下 英愛、岡田 泰平、平井 和子、成田 竜一、木下 直子、樋口 恵子、茶園 敏美、蘭 信三、猪股 祐介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 384
3. 書名 戦争と性暴力の比較史へ向けて	

1. 著者名 一ノ瀬 俊也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 384
3. 書名 飛行機の戦争 1914 - 1945 総力戦体制への道	

1. 著者名 若尾祐司、木戸衛一	4. 発行年 2017年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 380
3. 書名 核開発時代の遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西村 明 (Nishimura Akira) (00381145)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	柳原 伸洋 (Yanagihara Nobuhiro) (00631847)	東京女子大学・現代教養学部・准教授 (32652)	
研究分担者	蘭 信三 (Araragi Shinzo) (30159503)	大和大学・社会学部・教授 (34453)	
研究分担者	渡邊 勉 (Watanabe Tsutomu) (30261564)	関西学院大学・社会学部・教授 (34504)	
研究分担者	福間 良明 (Fukuma Yoshiaki) (70380144)	立命館大学・産業社会学部・教授 (34315)	
研究分担者	山本 昭宏 (Yamamoto Akihiro) (70644996)	神戸市外国語大学・外国語学部・准教授 (24501)	
研究分担者	木村 豊 (Kimura Yutaka) (70769059)	大正大学・心理社会学部・専任講師 (32635)	
研究分担者	一ノ瀬 俊也 (Ichinose Toshiya) (80311132)	埼玉大学・人文社会科学研究科・教授 (12401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------